

Adam Bede の Hayslope 村, *Silas Marner* の Raveloe 村, *Felix Holt* の Little Treby 村がそれぞれの小説に意味するもの(3)

嶋田 貴美子

5. 結 論

上田女子短期大学紀要十四号, 十五号に続くこの論文の結論を述べる前に, 十四号に提示した命題をもう一度ここに明示しておこう。

George Eliot が小説家としての人生を歩むことになったのは, 1858年1月号の *Blackwood's* 誌に “The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton” の最初の部分が掲載されて以来のことであり, その作品はその後の, “Mr Gilfil's Love-Story” 及び “Janet's Repentance” の小品と共に, 翌年 *Scene's of Clerical Life* というタイトルで出版された。しかし George Eliot の小説家としての地位を確立したのは, 何といたっても後に続く *Adam Bede* (1859年) であり, 更に彼女の名声を高めたのは, *The Mill on the Floss* (1860年) と *Silas Marner* (1861年) であった。その後次々と大作, *Romola* (1862年), *Felix Holt, the Radical* (1866年), *Middlemarch* (1871-2年), *Daniel Deronda* (1876年) を発表し, 20年間にわたって小説家 George Eliot の名声をはせたのである。

その中で私が特に *Adam Bede* と *Silas Marner, Felix Holt the Radical* を一つのテーマの下に選び出したのは, これらの多くの彼女の小説の中でもこの三つだけが小説の舞台に厳密な時の指定があり, そしてその3つの作品にはそれぞれの作品のテーマとは別の, ある一貫した作者の思想的潮流があることを認めたからである。その作者の思想の流れを探ることが, 1. はじめに⁽¹⁾の部分で述べてあるような意味あいから, 上記のタイトルの下に私が究明したい骨子なのである。そのプロセスとして5段階を定め, 当紀要十四号, 十五号にわたって展開してきたわけであるが, いよいよその最後の項である結論を述べる段階に到達した。まずはじめにそれぞれの小説の構成を見ることから始めよう。

(1)

Adam Bede のテーマは, 本学紀要十一号の筆者の論文⁽²⁾の中で述べてあるとおり, 大工で生来のがんこ者の Adam の心の中で, 26歳から1年足らずの間に起った transformation of pain into sympathy (苦しみから同情への変容) と, 彼が結婚により幸福を獲得するまでの心の軌跡である。それは次のようなできごとを通して展開される。

1. 家族に対して重荷でしかなかった大酒飲みの父親の死
2. Adam が深く愛していた恋人で, Donnithorne 地主の下にある小作人, Mr. Poyser

の姪, Hetty Sorrel と, Donnithorne 地主の孫息子 Arthur との戯れの恋

3. Adam と Arthur との決闘
4. Arthur の軍隊への旅立ち
5. Adam と Hetty との婚約
6. Arthur の後を追って旅に出た Hetty, Windsor で Arthur との間の子供出産
7. Hetty のその嬰兒の殺害
8. Hetty の処刑(絞首刑)(⇒ Arthur の取計らいで流刑に減刑)
9. Donnithorne 老人死去により新地主 Arthur 誕生
10. 地主の業務を rector, Mr. Irwine に頼み Arthur, Hayslope 村離脱
11. かたくなに口をとぎした Hetty を, 罪の自白に導いた Methodist の伝導者で Mrs. Poyser の姪, Dinah Morris と Adam との恋⇒結婚
12. Adam と Arthur の話し合い⇒和解

この構成からもわかるように, Adam についてのこのテーマの達成は, (a)父親の性格の弱さの許容, (b)安易な人生観を持つ Arthur との確執から許容, (c)大きな罪を犯した Hetty の許容という, 3つの大きな段階を追って展開されるが, 中でも最も大きなウェイトを持っているのが(b)のステップである。すなわち, この小説のテーマである Adam のその心の軌跡は, 大酒を飲み夜中に帰宅途中橋から小川に落ち水死した父親の死という, 大きな代償を払って, どうしても罪に陥らざるをえない弱い人間を許すことをやっと学んだ Adam が, それまで心から信頼していた, 名門の地主の孫, Arthur の不埒な行為のもたらした重大な結末の, 自分の身にも及ぶ深刻な事態を自分の力で克服してやっと達成されたのであった。虚栄心のみで動かされていた浅軽なまだ17歳の少女の Hetty を殺人者にしたて, Adam に最愛の婚約者を失わせることになり, 家系に何の汚点もないことを誇り厳しい道徳意識を持った Poyser 一家にこの上もない恥辱を与えた Arthur の罪に比べれば, 家族のお金をすべて酒に浪費し, 常に酒におぼれていた父親の罪はまだしも軽いものだったといえよう。

Adam と Arthur との確執は Grove の森で Arthur と Hetty がキスを交わしているのを Adam が目撃した時から始まる。George Eliot が *Adam Bede* の中で述べているように, 「当時は, 田舎の人々の中で, 最も鋭敏な精神を持った者たちは, 昔の人々が背の高い人間の姿をして神々が通り過ぎていくのをつま先立ちして見た時に感じたのと同様, 紳士階級の人々の姿を見るとひそやかなおそれを感じた」⁽³⁾ のであって, 地主階級はいわば神にも等しい特権と絶対性をあわせもつものと自他共に認める存在であったのであり, 特に閉鎖的で厳しい道徳律を持った1799年の Hayslope 村では, 地主になるべき青年と農民の娘との結婚など, 村娘の素朴なシンデレラ願望としては古くからあったものの, 現実の問題としてはとうてい不可能なことだったのである。

このことを一番よく知っているのは Arthur 自身であった。しかし, 村のすべての若者があこがれの目を向けるばかりか, Hetty の軽そつなふるまいにことのほか厳しい Mrs. Poyser でさえ時にははっとさせられるほどの美貌の持ち主で, さらに虚栄心のかたまりである Hetty

には、Arthur との結婚で実現される Donnithorne 邸での lady としての生活は、この上もない魅力だったのであり、Arthur の何の確固たる裏付ももたないが、言葉たくみな甘い言葉にのめりこんでいったのは当然である。一方自分の真剣な求愛にもあまり反応せず、何かにつけて感じられた Hetty の不審な行為の原因が、Grove の森で2人を目撃してすっかりわかった Adam の Arthur に対する激怒は単に Arthur への個人的な怒りではない。

Arthur がキスをしていた相手が Hetty ではない他の村の娘であったとすれば、Adam は Arthur にこんなにも憤りを感じなかったであろう。そしてまた村の人々の誰もが Arthur のことを、村人の一人一人の幸せのために努力をおしまない細やかな精神を持った青年であると信じて疑わず、彼が現在の老 Donnithorne に代わって、さすがに若者らしい進取の気性に富んだ新しいタイプの地主になる日を待ち望んでいる、いわば Adam も含めた Hayslope 村の村人の誇りとする青年でなかったら、Adam は Arthur をもう少し大目にもみることもあったであろう。すなわち Adam は Hetty への強い愛と、the most English England の地に位置する Hayslope 村に残っているその古きよきものとしての gentry への憧憬と誇りが裏切られたその失望感にかりたてられ Arthur に向かっていたのではなかろうか。したがってこの時すでに Adam の心の中では Arthur が代表する地主階級は、George Eliot が言う⁽⁵⁾過去の農村の glory に満ちた存在、あるいは英国人が総じて大切にしている古きよきものとしての存在意義を失ったのであった。そのためそれから後、Adam との結婚の日を間近に控えた Hetty が Arthur を追って Hayslope 村をぬけ出し、その旅の途中で生まれた赤ん坊を捨てて死に至らしめ絞首刑の判決を受けた時の Hetty と自分の煉獄の苦しみの中で感じた Adam の Arthur への怒りは、もはや誇りにも信頼にも根ざさない、自分と同等どころか数だん低い人間性を持った男として Arthur をさげすむ気持以外の何ものでもない。そしてその時の Arthur に対するそのさげすみは Adam だけのものではなく、Hayslope 村の村人全体の、特に Poyser 一家の感情でもあった。

このように Arthur の道徳上の罪もさることながらその罪の深さを Arthur に徹底的に思い知らせたのは Hayslope 村の村人たちの、gentry 階級への畏れの気持と並存している gentry へのその権威に押しつぶされることのない健全な目であった。これは産業革命によって農村においても多かれ少なかれ人々の意識変革があったことと当論文3の部分でみてきたように、イギリスの農村が古くから地代の金納化など貨幣経済が浸透していたこと⁽⁶⁾によって地主に対する農民の精神がかなり解放されていたその本質の顕現のように思われる。とにかく Chapter 32で Donnithorne 地主が農地のことで Fall Farm に難題を持ちかけにやってきたときの当の地主に対しての Mrs. Poyser の毒舌や Arthur に対する Adam の厳しい告発等の中に、19世紀前後の Hayslope 村が閉鎖的で地主を頂点とする古くからの秩序を持った村であった割には村人の意識は Liberal であったことがうかがわれるのである。またその Liberal な意識は、この章の(4)のところで詳しく述べるが Hayslope 村の人々の宗教的偏狭さをもなくし、誇り高き教区民であることを自認している Mrs. Poyser も Methodist でありしかもその伝道者である姪の Dinah をこよなく愛し、Adam もまた rector の Irwine 氏を大いに

賞讃しているにもかかわらず Methodist である弟 Seth と兄弟としての深い愛情と強い絆で結ばれていたし、上記の Methodist の女伝道者 Dinah を結婚相手に選んでいることからわかるように、村人たちに宗教という権威にとらわれない人そのものを見る目を養ったのである。すなわち Mrs. Poyser や Adam が代表する Hayslope 村の村人たちはみんな地主や rector や Dissenter 等を、社会的地位とか彼らに付された権限やレッテルで判断することは全くなく、健全で冷静に人を見る目が養なわれていたのである。

1799年6月18日という Adam Bede の日付の制定は、先に記したこの小説のテーマを展開する上でその時期の Hayslope 村が格好なものであったと共に Dinah Morris の Methodist の女伝道者としての立場がその時間的な制約を必要としたのであろう。そしてさらにその時の Hayslope 村の村人の心の中に芽ばえ始めた Liberalism が、Hetty と Arthur のあるまじき恋とその結果をめぐる Adam のその内面的成長のテーマをよりよく展開する必要不可欠の条件であった。しかしその村人の意識の Liberalism は Arthur の非道徳的罪に見られる地主階級の内部的破滅の要因と共に、村における地主の権威を失墜させる強い力を持ったのである。そしてそれはまた rector の権威の失墜ともあいまって、総じて古来からのイギリスの典型的農村を崩壊させ新しい村へ新生させる原動力になっていくのである。かくして George Eliot がいつくしんでいるイギリス農村の glory の重要な一角がすでに1799年の Hayslope 村で失われようとしていた。

このように典型的なイギリスの農村が農業国として栄えた過去の glory を失い、新生へと向かう過程においてみられるそれを推進させる要因には二つのことが考えられる。一つは産業革命による農村への影響力であり、もう一つは村の体制そのものの中にある矛盾である。これが1799年の Hayslope 村でどのように現われたかは今みてきたとおりであるが、Silas Marner の Raveloe 村ではどのように展開されているか次の part でみることにする。

(2)

Silas Marner の構成は次のようになっている。

1. 敬虔なクリスチャンで織工の Silas が彼が属する宗教的 Sect (Calvin 派と思われる)⁽⁷⁾の中で周りからも David と Jonathan とよばれていたほど緊密な仲であり自分もまた無二の親友と確信していた友のしかけたわなにはめられ教会のお金を盗んだという嫌疑をかけられたあげく、その友に婚約者まで奪われる。
2. 神への信仰、人間への信頼をなくした Silas の、故郷 Lantern Yard の町脱出
3. Raveloe 村の石切り場の石小屋 (Stone cottage) に Silas 居を定める。
4. Silas, 15年間、ただ織物の仕事の報酬である金貨の蓄積のみを楽しみに孤独な生活を営む。
5. Raveloe 村の地主 Cass 家の次男で手のつけられない放蕩息子 Dunstan が Silas の金貨を全額盗んで行方をくらます。
6. その盗難事件を通じ、Silas と Raveloe の人たちとの心の交流のめばえ

7. Silas の住居へ 2 歳ほどの女兒出現 (後に Eppie と命名。Cass 家の長男 Godfrey と酒場女 Molly との秘密の結婚により生まれた子供。Molly の死→ Godfrey の Molly からの解放)
8. Godfrey と淑女 Nancy Lameter との結婚
9. Eppie を通じて閉ざされた Silas の心の解放 ⇒ Silas の信仰心, 人間性の回復
10. Eppie と Winthrop 家の息子 Aaron との婚約
11. stone-pit の水底に沈んでいた Dunstan と Silas のなくなった金貨の発見
12. 子供のいない Godfrey と Nancy 夫妻, Eppie を自分たちの養女にすることを Silas に要請
13. Eppie の, その要請の拒絶
14. Eppie と Aaron の結婚による stone-pit の家での Silas を交えた 3 人の生活 ⇒ Silas の至上の幸福

以上の構成からもわかるとおり, *Silas Marner* のテーマは信仰と, 人間に対する信頼を喪失した織工 Silas の Raveloe 村での人間性回復から真の人間の幸福を得るまでの過程である。活発に宗教活動を行い, 町の織工たちの小さな宗教的 Sect の中では大そう重要な地位を占め, 友人との深い霊的交流の中で, 貧しい織工ながら充実した日々を過ごしていた Silas が, 魂のぬけがらのようになり, 自分にとってかけえいのない native town である Lantern Yard の町をさまよい出た背景にはいくつかの大きな人道的, 宗教的な問題があった。

まずそのうち 1 つは, Silas が倒れることなくして体の硬直と意識不明をきたす一種の癲癇のようなものの発作を起こす持病を持っていて, ちょうどその発作を起こしている間に親友の William Dane が, Silas が番をしていた教会のお金を盗み出し, Silas を完全な盗人にするために Silas のナイフをこっそり持ち出して泥棒のにせの証拠を作り, すっかり Silas にその罪を負わせたことである。2 つ目は, そのことに対する Silas の無実の訴えに, 真相究明のための方法としてその宗教のなかまたちが持っている唯一の手段である神籤 (lot)⁽⁹⁾ をひくことが決議され, さらに神籤は Silas が罪を犯したことを明かす結果を出したことである。そして 3 つ目は, 婚約者 Sarah が神籤の結果のあとすぐに Silas との婚約を解消し, その後 1 ヶ月もたたないうちに William Dane と結婚してしまったことであった。その時の Silas の心の状態は, 神籤の結論が出たあと William Dane に投げつけた, 「僕が最後にナイフを使ったことを覚えているのは, 君に革ひもを切ってやるために取り出した時だ。僕はそれをポケットにもどした記憶がない。君がそのお金を盗んだんだ。そしてその罪を僕になすりつけるために策を弄したのだ。それでもなお君はうまくやってくだらう。世の中を正しく治めるそんな神なんてありっこないんだ, 神はうそつきなんだよ, 無実の者に罪の証言をするようなね。」⁽¹⁰⁾ という Silas の自分の言葉の中にはっきりと読み取ることができるであろう。

そのような Silas が Raveloe 村に安住の地を見つけたのはどのような理由によるものであったのであろうか。それにはもちろん Silas をそのような窮地に追い込んだ, 社会的, すなわち人間的関係の側面と宗教的側面の 2 面からの考察が可能であろう。人間関係の面におい

ては Silas 自身は自分を知る者のいない土地であればどこでもよかったのであろうが、しかし、一方 Silas のような街から流れ者はどこの村でも受け入れられるという訳ではない。Adam Bede の Hayslope 村のように、Donnithorne 地主の下に村人のそれぞれが有機的に結びつき、独得の Cords の下に誇りを持って生活している村では Silas などの入りこむ余地は全くない。その点 Raveloe 村は古い家柄の家はたくさんあったものの、彼らはほとんどが yeoman であり、上下のつながりによる村人の生活の拘束があまりない開けた人間関係が可能な、いわば村落共同体としての枠組みが比較的ゆるやかな村であった。その上 Raveloe 村のような古い村々では村人たちは「こういった織物の商売はなくてはならないものであるけれども、全く悪魔 (Evil One) の助けなしにはなしとげられないものだ」と思いこみ、それで街から村に移住してきた織工たちに仕事を次々と依頼するにもかかわらず、常に疑いの目を向け、最後までよそ者扱いをする場合が多く、織工たちは村人とは単に商売上の金銭的なつきあいのみで、何ら個人的な煩わしい関係を作る必要がなかったのである。極度の人間不信に陥っていた Silas には、この Raveloe 村の村人たちの傾向は大変好都合のことであった。

また当論文の 4.(B)の部分でも述べた通り、Raveloe 村の村人たちや rector の Crackenthorp 氏の言動からしても、Raveloe の村は宗教的にはひじょうにおおらかなものであった。Silas の故郷の Lantern Yard は産業革命によって都市化された織物の街でその中で Silas は次のような精神的生活をしていたのである。

His life, ..., had been filled with the movement, the mental activity, and the close fellowship, which in that day as in this marked the life of an artisan early incorporated in a narrow religious sect, where the poorest layman has the chance of distinguishing himself by gifts of speech, and has, at the very least, the weight of a silent voter in the government of his community. Marner was highly thought of in that little hidden world, known to itself as the church assembling in Lantern Yard ; (彼の生活は行動力と精神活動と緊密な友好とに満ちあふれていた。それは今でもそうであるが、当時もまたある 1 つの狭い宗教的な宗派に若い頃から所属していた職工の生活を特徴づけるものでもあった。その宗派では、極貧の平信徒でも弁舌の才能があれば名を成す機会にも恵まれ、そしてまた少くともその教団の統治にひそやかな一票を投ずるという重要な役割をも得ることができた。マーナーはランタン・ヤードで教会集会として知られていたその小さな隠れた世界では高い評価を受けていたのである。)

このような熱烈な、かつ貧しいながらも充実していた Dissent の一教徒としての生活が破綻した今、Silas の逃亡先はその活動的な宗教生活をはじめ、彼の Lantern Yard での生活一切を忘れさせてくれるところではなくてはならない。その点 Raveloe 村は「たくさんの果実が、実るがままに落ちるがままに、手入れもされていない果樹園、広々とした教会墓地の中の大きな教会、礼拝の時間なのに家の戸口でぶらぶらしながらただその教会を見つめているだけの村人たち、小径をとぼとぼとやって来るかあるいは Rainbow (酒場) の方に曲がっていく赤ら顔の農夫たち、男たちは腹いっぱい食べて夕方の暖炉の明りの中で眠り、一方妻たちは

linen をたっぷり貯えているらしい家々」等、「Silas Marner の麻痺した信仰心をかきたてて痛みを感じさせるものは何一つなかった」⁽¹⁶⁾のである。

そのような Raveloe 村での生活で Marner が見出した唯一の楽しみは、日々たまっていく金貨との対話であり、また毎夜夕食後に行なわれる、時間をかけて何回もその金貨の数を数える孤独な饗宴であった。つまり Silas 自身織機の一部になり、彼の信仰も命も、人間であることの一切が日々得る金貨に集約されたのである。金貨はたまればたまるほどますます Silas をそれに執着させ、それがまた Raveloe の村人たちからさらに彼を隔離させることになった。すなわち Silas は Raveloe 村に、Lantern Yard の町と全く異なる社会環境、宗教的環境を求めながら自らは Lantern Yard での生活の手だてであった織工としての生活形態をそのまま持ちこんでいたのである。人間どうしの信頼も心のよりどころとなる信仰もなくした Marner にとっては貨幣に頼ることしか生きる道がなかったのかもしれないが、せまいセクト主義に走らず豊かな農村特有のおおらかな宗教意識に根ざした開放的な人間関係と、リンネルを織って届けるたびに excellent housewife から分けてもらう pork でごうかなごちそうを楽しめるような Raveloe の村の中にあっては、彼の生活の中にみられる、町のその貨幣経済の弊害はなおさらクローズ・アップされてみえる。しかしその弊害は Marner にとっては弊害ではなく、逆に生きのびるための鎧となった。Marner が Raveloe 村の人たちのような豊かな人間性を回復するためには、その鎧をこわすことが必要であった。すなわち彼の身から金貨をはぎとることである。それは Cass 家の次男 Dunstan によって達成された。15年間もただひたすら働き、ため続けていつくしみ続けてきた金貨をそっくり盗まれた Silas は、もはや再びまた以前のようにむちゅうで織機にむかう気力もない。村の人達の盗難についての問いかけに応じ、それに対する同情をすなおに受け入れることができるようになり、やっと村人たちとの心の交流の突破口が開かれたのである。その後さらに急速に Silas が外に向かって心を開いていく原因になったのが Eppie であった。Silas にとっての Eppie の意義については本学紀要十二号の筆者の論文の中に見られるとおりで⁽¹⁷⁾あるが、Eppie が自分の養女になってからは Silas の労働は単に金貨を愛し希求するがための労働ではなく、自分と娘の生計をたてるためという、人間本来の労働の意義の裏付けを持つようになった。2歳ほどの Eppie の養育は Silas には並たいていの苦勞ではなかったが、彼の人生は Eppie によって初めて過去と現在、それから未来への幸せという統一を得たのである。

しかし18歳まで育てあげた Eppie を、自分たち夫婦に子供ができない Godfrey は Silas から奪おうとする。Red House として村でも名高い Cass 家の娘になり、Lady としての一生を送ることに Eppie も Silas も無上の喜びを感じるであろうと信じて疑わない Godfrey と Nancy は、その行為の中にある、富と権力を持つ者の傲慢さと利己的観念に気付いていない。それを気付かせたのが弱冠18歳の Eppie であった。Eppie は彼らの申し出を即座に拒否したのだ。彼女はたった今ふいに現われた実の父の家である Red House での、何不自由のない lady としての暮らしよりも、貧しいけれども強いきずなで結ばれている育ての親 Silas との stone cottage での生活を何のためらいもなく選んだのである。

Godfrey と Nancy のその時の落胆, 敗北感, 自分の子供であることを知りながら, Eppie が Silas のところに現われた16年前に, 何ら父親としての表明をしなかった Godfrey への Nemesis⁽¹⁰⁾ ではあったが, また一方で Raveloe の村人が gentry に対して冷静な目で見始めた現象であり, それはまた Adam Bede の Arthur にみられたような gentry の内部破滅的テーマともなっているのである。

このように Raveloe 村は Silas Marner の人間回復の温床となった村であり, そしてまた Adam Bede の Hayslope 村とおなじく gentry の持つ理不尽さを冷静に批判し, 富や権力よりも人間的な愛を重視する村人たちの健全な目を養うことのできた村であった。Raveloe 村は当時イギリスに吹き荒れていたためまぐるしい社会的変化からも地理的にも隔絶したまさに timeless village ではあったが, ここでもやはりイギリスの農村特有の村人の Liberalism は強く, それと共に上記のように村の体制の中にある矛盾はより明確になり, 村の上層階級を, 絶滅寸前の yeoman が構成しているという村落共同体の秩序のもろさともあいまって, Hayslope 村の場合よりさらに村落の旧体制は崩壊する危機にさらされているといえよう。このテーマは Felix Holt の Little Treby 村でより顕著に展開される。

(3)

Felix Holt の構成は次のようである。

1. Mrs. Transome の紹介 (Transome 家の家庭環境)
2. Transome 家の長男, くる病で手のつけられない放蕩息子 Durfey の死により, Transome 夫人の寵児であった次男 Harold の15年ぶりの Smyrna からの帰省 ⇒ 34歳になった Harold の内面的変化 ⇒ Transome 夫人の失望, 苦悩
3. Transome Court のある Little Treby 村の隣町 Treby Magna の, market town から manufacturing town への変遷の過程の紹介
4. Treby Magna の Dissenter の牧師 Mr. Lyon の紹介 ⇒ 彼の養女 Esther の紹介
5. Mr. Lyon のところに相談にきた, 主人公 Felix の母親から Felix Holt の紹介
6. Felix の Lyon 家への訪問 ⇒ 娘 Esther との恋の芽ばえ
7. Transome 家の顧問弁護士 Jermyn と Harold との決定的不和
8. Treby Magna と隣の炭鉱の町 Sproxton の miners の Radicalism の先頭に立つ Felix の, aristocracy に属し rich Radical なる Harold Transome への憎悪
9. Reform Bill の後初めての選挙の当日, 投票場に指定された Treby Magna での民衆の暴動
10. 暴動の首謀者であること, それから警察官殺害の罪による Felix の投獄
11. Harold Transome の落選
12. 過去何回となく lawsuits がくり返された Transome Court は, Esther の実の父親のものであることが判明
13. Felix の有罪確定

14. Esther の, Felix 擁護の法廷での証言により Felix の恩赦決定
15. Jermyn の, Harold に対する公衆の面前での “I am your father.” 発言 ⇒ Harold の社会的立場の喪失
16. Mrs. Transome の失意
17. Esther, Harold の求婚を断り, Felix との結婚を決意し, Transome Court の所有権も放棄
18. Jermyn の国外逃亡, Transome 家の人々も Little Treby 村離脱 ⇒ Mrs. Transome まもなくもどり死去

この構成の複雑さを見てもわかるように, *Felix Holt* は, *Adam Bede* や *Silas Marner* とは全く異なる, 作者の, 錯綜した執筆態度がうかがわれるのである。小説のタイトルからすればこの小説の主人公は当然 Felix なのであり, 極度の貧困に我身を追いこみ, Radical として純粋に生きようとした Felix Holt の Esther への愛と結婚をテーマとしているのであるが, この当の主人公は chapter Vまで登場せず, それまでは Mrs. Transome の描写が極立っているところを見ると, 広大な Transome manor の領主であるこの夫人の悲劇的人生を描ききることが *Felix Holt*における作者の意図だったのではないかという錯覚すら感じる。第一幕第一場でその劇のテーマや結末が暗示されるという Shakespear 劇の定石からすれば, この小説の出だしはかなり異例のものといえる。しかし, 当論文の 1 の部分で述べた⁽¹⁹⁾とおり, 「より広い public life によって規定されない private life はありえない」とする作者の考え方からすれば, 古くからの market town からたちまちのうちに manufacturing town に変化したその町の振興勢力を代表する Felix や Esther の心情を描くためには, のどかな田園地帯であった当時の旧勢力を代表する Transome 夫人や Harold の詳細な描写が先行することはさして不自然なこととも思われぬ。とは言え, 研究者たちの間でこの *Felix Holt* と共に構成ミスが指摘される *Adam Bede* の中で, Chapter I の最初から主人公 Adam は出てくるものの, heroine とも言い切れない Hetty Sorrel が登場するや, 彼女の描写が Adam が主人公であることを忘れさせるほど real で迫力にみちたものであるために, Hetty の悲劇的人生がこの小説のテーマであるかのような感じにおそわれるのと同様, *Felix Holt* でも Mrs. Transome がまっ先に劇的な登場のしかたをし, その描写に, 単に Felix や Esther の人生や心情の背景となるだけの意味以上の迫真性があるために, 小説がかなり進んでからまず母親の口から紹介され, 次の章でさしたる特異性もないままに何げなく登場する Felix が主人公であることに読者はなかなか気づかないのである。実際 *Felix Holt* では Felix の登場のあとですら Transome夫人の存在の方が当の Felix より, より大きなウェイトがかけられているように見える。これらの現象は作者が女性であって, 女性の心情を描くことにこの上もなく巧みであったことにもよるであろうが, *Felix Holt* の場合, それでもやはりタイトルを Mrs. Transome としなかったところに私は作者の意図をくみとりたい。

それはこの小説が単に人間のドラマとして描かれたのではなく, 当論文 1 の部分で述べたよ⁽²⁰⁾うな, 作者が glory として愛惜する, イギリスの古い典型的な農村が, 時代の波にのまれ都

市化していかざるをえない過程とその過程における人間の苦悩を描くことも作者の意図だったからである。

古くからの村や町が全く生活様式の異なる新しい村や町に推移するのは形態的にはやさしい。しかし村や町を構成するのはその住民なのであって、彼らにははるか遠い昔から続けてきた生活様式を捨て、たちまちのうちに設定されたその新しい環境にすぐに適応することはそう簡単にできることではない。そういった、生活の急激な変化のまっただ中に置かれているのが、「local landed interest にのみ強い結びつきを持っていた」のどかな market town から20~30年ほどの間に「国家の大きな circutating system に直結した」manufacturing town に大変貌を遂げた Treby Magna の町とその近郊、特に Treby Magna からたった1マイルほどしか離れていないところに位置する Little Treby 村に住む住民であった。中でもその新しい時代の流れに最も適応できないのが古くから Treby Magna の market town を後だてに栄えてきた、Hayslope 村や Raveloe 村よりさらに格式あるイギリスの農村である Little Treby 村の manor の領主 Mrs. Transome であった。Mrs. Transome の中には領主としての Tyrant 的性格、自尊心、旧式農業、断固たる Torism, 排他主義等々、古来からのイギリス農村を統治する地主の持つこれらの性格が凝縮している。そして彼女の性格のそのことごとくがもろくもこわれていく過程が、Little Treby 村自体の、旧体制崩壊から新生へと向かう過程とオーバー・ラップされているように私には思われる。

Treby Magna の町がそもそもそこから2マイルほどのところの Sproxtion の町で mines が掘られ始めるようになって急速に変化していったように、Treby Magna からたった1マイルしか離れていない Little Treby 村が Treby Magna を規定している mines と manufactures, それから特に、それらの仕事にたずさわる人々の宗教や思想の影響をもろに受け、Treby Magna に同化していくことはもはや時間の問題であった。そういう状況の中で生きのびていくためには新しい時代思潮にそったそれなりの思考様式に変えていかなくてはならない。ところが Mrs. Transome は決してその思潮に順応しようとはせず、かえってかつて Treby Magna を respectable market town としていた local landed interest の代表としての過去の栄光にしがみついている。息子 Harold にしても miners や工場労働者と同様 Radical を宣言し、選挙にも Radical として出馬したが、それは明らかに形ばかりで、彼の行為には微塵も Radicalism を感じることはできず、いいかげんな Torism の裏返しのような思考様式に、多くの Treby Magna の Working class を構成している Radicals の反感をかった上に、Transome 夫人の実家 Lingon 家と Transome 家の名を汚し、世間での彼自身や Transome 家の家長を自認する Transome 夫人の立場を最悪のものにしたばかりか、選挙には落選し、新生の Trebian にはほど遠い存在であった。

その点 Treby Magna の郊外に、古くから、これまた広大な manor を有する Debarry 家の長男 Philip は、一応は家代々の思考形態を踏襲し Conservative として選挙に立候補して当選するが、父親の sir Maximus Debarry が全く理解できないという New conservative の一人であって、Treby Magna が market town であった当時の local landed inte-

rest の代表としての家の生活形態は Transome 家と同様変えることはできないにしても, mines と manufactures によってもたらされる現 Treby Magna のひじょうに複雑な生活様式と何とか折合ってやっていけそうな将来性を感じるのである。

しかし概して, mines や manufactures の街に住む人々の苛酷な労働と, その労働にみあうことのない貧困とは, 彼らの代弁者 Felix が盛んに主張したように, Transome 家や Debarry 家などの貴族階級の特権である “a right to be idle” に対する反感と, 人間の真実の生き方にそぐわない, その階級にある者たちの生活の中の欺瞞を, 炭坑の町 Sproxtton や Treby Magna の労働者たちにあばき出させることになった。すなわち国家の大きな Circulating system に組みこまれた現 Treby Magna にとって, もはや過去の local landed interest は不必要であるばかりか, かえって疎外されるべきものとなってしまったのである。

1832年12月の, Reform Bill の後初めて Treby Magna で行なわれた選挙の結果では Tory 1人, Whig 2人という当選者の中に Radical は一人も加わることができず, 表面的には, Trebian とよばれる現 Treby Magna やその近郊の人たちの中においては Radical 思想は色濃いものの, まだまだ Treby Magna が respectable market town であった当時の旧勢力の力が優勢であったようにみえる。しかしそれはいくら Reform Bill によって選挙制度が改善され, 有権者が増大したとはいえ, その大半が低所得者である一般労働者階級にまで選挙権が拡大されていなかったからであり, Trebians の真の思想的潮流は, むしろ選挙当日の労働者の暴動の中に見い出すことができるのである。

その暴動の主たる構成員は工夫 (navvies) や炭坑夫, 石切人夫等であったが, 彼らは, 貧しい生活を強いられている社会の現状に対する大きな不満はあるものの, それに対して自分たちがどう対処すべきかという理性は持ちあわせず, 単に暴動という破壊的な形に訴えるより他に自己主張の手段を持たなかったのであるが, その点 Glasgow で学んだという Felix は彼ら労働者の中では数少ない知識人であり, 社会の底辺にいる労働者の立場や, 彼らをそのような貧しい状況に追いこんでいる社会の持つ問題や矛盾をしっかりと分析することができた。

Felix が学んだという学校が Glasgow 大学であったという明確な記述はないが, 彼の言動をみればそれはほぼまちがいないであろう。⁽²¹⁾ Glasgow 大学は経済学の父といわれる Adam Smith が自ら卒業し, その後教授として後進の指導に当たり, 果ては学長にまでなった, 彼の思想的な影響の強い大学である。⁽²²⁾ Felix はここで学ぶために早世した父親が残したお金を全部使い果たした上, お母さんの「どうしても理解することのできない学問」を身につけて帰省したのであった。まず Felix は, 父親が生前大きな誇りを持って営んでいた薬屋を継ごうとしないどころか, それらの薬を those absurd medicines といって非難し, その商売を those gulling advertisements (まやかしの宣伝文句で金をもうける仕事) といって否定した。要するに Felix は物を販売することにより金銭を取得する商売というものを pickpocket (すり) を引き合いに出すほどにまで蔑み, それよりも現在の彼の仕事である watchmaker の下で働く journeyman の方を honest labour of my hand としてより高い価値を置くのである。⁽²³⁾

Felix のこの考え方は「資本主義の発達, イングランドよりもはるかに多くの, おくれた

要素をひきずって」おり、「それにもかかわらずかなり急激に歴史の法則のかんてつをしめした」Scotland の中心都市 Glasgow で多感な青春時代を過ごしたことによるものであろう。⁽²⁴⁾その上彼の父親は元来織物の町 Lancashire の weaver であったのであり、彼は今もなおそこで weaver をやっているおじを Glasgow からの帰りにたずねているが、Lancashire もまた住民の口に “Food gives heart” という言葉がまっ先にのぼるほどの貧困の町であった。⁽²⁵⁾

極度の貧困家庭を描くことに不得手だった George Eliot の小説の中ではおしはかることはできないが、当時の manufactures の中心をなす綿織物工業にたずさわる者たちの生活の惨状は Mrs. Gaskell の *Mary Barton* を一読すればよく理解することができる。*Mary Barton* の舞台は Manchester であるが、そこで初めて strike が行なわれた時には、Manchester 近辺の労働者の、工場主に対する抵抗運動を支援するため、Nottingham や他の多くの町からの代表者と共に、Glasgow からの delegates もその Manchester に送られて来たのである。Felix はそのような Glasgow や Lancashire で産業革命によってクローズアップされた資本主義社会の矛盾を自分の目でしっかりと見つめ、そしてその社会の不平等性への憤りを強めたのであった。

労働者の暴動といっても、産業の機械化に伴う世の中の諸変化に対して種々の形体をとったが、1832年12月の選挙当日の Treby Magna の暴動は、古いイギリスの農村特有の強固な保守的体制を持った地域に、急激に多数の貧しい miners や工場労働者が流入した町村にありがちな、政党的 chaos の中で、強いていえば tory に対する嫌悪感や自分たちの貧しい生活への不安があるだけで、確たる目的意識もないままに起されたものである。Felix の政治的立場はもちろん彼ら rioters と同様 Radical ではあったが、自らの思想を Privilege (特権), monopoly (独占権), oppression (圧制) に対するものと明確に定めることのできた彼にとって、その暴動は何ら彼の Radicalism をかきたてるものではなかった。しかしそれでもそれは主義主張を同じくする同志たちの活動である。Felix は偶然その暴動にまきこまれ、やむをえない形で rioters の、Whig の Garstin の拠点である旅館 Seven Stars の襲撃にも加わり、正当防衛として警察官 Tucker に暴行を加え殺害にまで到り、それから最後に行なわれた rioters の Debarry 家襲撃にも意にそわない力におされて加わったとされているが、それら一連の彼の行為の中には、確かに偶然性、正当性は認められはするものの、彼の Radicalism の中にある破壊的要因も多分に感じられるのである。そしてそれはまた、当時の Treby Magna のような地域の政治を行う上でどの政党にも完全な政治的正当性を求めることができなかつたように、彼の Radicalism の思想的限界でもあった。しかし、George Eliot は Treby Magna の Malthouse Yard の pastor で、心情的には Felix の同志である Mr. Lyon の娘 Esther に、Transome 家の長男 Harold の求婚による lady としての見込を捨てさせ、貧しい Felix と共に歩む生涯を選ばせた。すなわち作者はこの時点で、高貴な家系の上に安住しているだけの conservative の人生よりも多々問題はあるにしても Radical としての生き方に、より人間が生きる真実を認めたのである。

それもし Esther が純粹に Lyon 氏の娘であったとしたら、フランスで高度な学問を身

につけて自分の人生をしっかりと見つめることのできた才女 Esther であるから、父親と同じ思想的基盤に立つ Felix に、lady としての将来が約束されているとはいえ父親の立場とは相容れない関係にある Harold よりも強い親近感と愛情とを感じることは当然であったであろう。しかし Esther は Lyon 氏が若い頃助けた長旅に疲れ衰弱していた女性の子供で、Felix と Harold との対照的な若者のどちらかを結婚相手として選ぶことが迫られた時にはもうすでに古くから裁判ぎたの多かった Transome 邸が実は Esther の実の父親だった人に所有権があったのであり、その実の父親なき今となっては Esther に Transome 邸の相続権があることがわかっていたのである。ということは Esther は Transome 邸そのものに関する限り Transome 夫人や Harold よりも優位に立ち、彼女の家系とても Transome 家に劣らず高貴なものであることがわかった以上、Harold を結婚相手に選ぶことに何ら身分上の劣等意識を持つ必要がなく、自ら Harold を結婚相手に選んで憧れの人 Mrs. Transome に負けない高貴な lady としての生活を営むこともできたのであった。一方 Harold の方は Esther との結婚は法律的係争に終止符を打ち邸の安泰のために願ってもない良縁だったのである。そういう法律的事実の顕現もさることながら、かねてから a sudden elevation in rank and fortune を day-dream に思い描いていた Esther にとっても、Harold との結婚はまたとないチャンスであったようにみえる。

Dickens がさかんに人間について生いたちはどうであれ血すじはあらそえないものであることを小説で力説しているが、George Eliot も、Esther をみる限りではその考え方に賛同していたようで、Lyon 氏の娘になった時はたったの2歳であった Esther を、それから20年ほどたった現在、貧しい Dissenting preacher の娘にはそぐわない、貴族的な特質を多々持った女性として描いている。

それには Lyon 氏の、娘にこの上もないたしなみを身につけさせようという気持からなされた彼女のフランス留学が大きく影響していたのであったが、彼女には上流階級の人たちの持つぜいたく好みや気難しさがあり、上べだけの上品気どりを軽蔑する気持があった。Dissenters が高貴な階級にある人々から軽蔑されるような存在であることを知り、彼女は我身の身分を公にすることを避けようとしたばかりか父親の属する Dissent の教会に行くことも否定する。学校の上流階級の友だちから a born lady にみえるといわれるのが誇りで、絹のストッキングをはいた時の足の甲の美しさとか、スリッパからスラリとのびた足の小さなかかととか、申し分ない爪の形とかきしゃな手首とか、彼女は我ながらほれほれながめたものである。

しかしフランスから帰り Dissenter の父親と暮らし始めて2年後、彼女の世界に Felix が現われ、人を傷つけるような暴言も吐くけれども、しっかりと真実を見ぬいているようなこの青年に興味と愛情を感じ始めたところに Transome 邸の所有権の知らせがまいこんだのを機会に Lyon 氏から出生の秘密を打ちあけられた Esther は、いかに Lyon 氏が苦労して幼ない自分とその病気の母親を介護したかを知るにつけ、急速に、長年にわたる激務に明け暮れ、日曜日の夕方のたばこの一服を唯一のぜいたくと考えているようなその Dissenting preacher, Lyon 氏の娘としての立場にめざめ、それまでになかった敬愛と信頼を Lyon 氏に感じ

始める。

Mrs. Transome や Harold の要請で試験的に Transome 邸に移り住むようになった時の Esther の心の中には自分のこの境遇を知ったら Felix が言うであろうと思われる “That is clearly your destiny—to be aristocratic, to be rich. I always saw that our lots lay widely apart. You are not fit for poverty, or any work of difficulty. But remember what I once said to you about a vision of consequences ; take care where your fortune leads you” というにがにがしい言葉と、父 Lyon 氏の “… you will seek special illumination in this juncture, and, above all, be watchful that your soul be not lift up within you by what … is rather an increase of charge, and a call upon you to walk along a path which is indeed easy to the flesh, but dangerous to the spirit. (「この機に及んで特別な光明を見い出すように。そしてとりわけ魂が、だんだん強められていく義務感のようなものによって心の中で舞い上ってしまうことのないように十分注意しなさい。そして、身には実に安楽であるけれども精神には危険である道を歩く誘惑にもね。)」” という静かな言葉とが、鮮やかに鳴り響いていた。フランスの学校に通っていた時であったならそのような声など一蹴し、憧れの a born lady であったことがわかった夢のような幸運に喜び勇んで Transome 邸に乗りこんでいったであろう Esther も、Treby Magna の working people の典型的な思想と生活のスタイルを身につけた Felix を知り、そして彼に愛を見い出し、さらには前途有望な聖職者であったのに、その職を捨ててまで Esther の母を助け愛し、そしてその子供である Esther をいつくしみ育てた現在の父 Lyon 氏のその人間性を知って、一人で生きているのではない自分や、世の中の複雑さや、また自分を取りまく人々の生の真実を実感した今となっては単純に我身の運命を喜んで迎えることはとうていできなかつたのである。すなわちその時の Esther の中には生来の aristocracy と rich, それからその後の生いたちからくる町の人々よりも身分的に低いとみなされていた Dissenting preacher の娘であることと poverty とが複雑にからみ合っていたのである。そしてそれはまさしく、イギリスの古く豊かな貴族的農村が急速に工業都市化された現 Treby Magna の町そのものを体現するものでもあった。

Esther の、そういう相反する二つの立場に立つことからくる複雑な状況は、彼女が Transome 邸で過ごしたわずかな時期にすみやかに整理されていった。そしてとうとう自分の気持に忠実になった Esther は Harold の求婚をことわり、riot の首謀者であったことと、警察官 Tucker を殺害した罪とでまだ刑務所に入れられていて流刑も噂された Felix との結婚を決意したのである。それは、Esther の心の中では working class が aristocracy を克服したことを意味し、ひいては Treby Magna の将来そのものを暗示するひじょうに意義深い決断でもあった。

そのような重大な決意を Esther にさせたものは、以前憧れたことのある貴族の生活やそこに住む gentleman に対する次のような開眼である。

…this life at Transome Court was *not* the life of her day-dreams : there was dulness

already in its ease, and in the absence of high demand ; and there was the vague consciousness that the love of this not un fascinating man who hovered about her gave an air of moral mediocrity to all her prospects. She would not have been able perhaps to define this impression ; but somehow or other by this elevation of fortune it seemed that the higher ambition which had begun to spring in her was for ever nullified. All life seemed cheapened ; as it might seem to a young student who, having believed that to gain a certain degree he must write a Thesis in which he would bring his powers to bear with memorable effect, suddenly ascertained that no thesis was expected, but the sum (in English money) of twenty-seven pounds ten shillings and six pence.

After all, she was a woman, and could not make her own lot. ... Her lot is made for her by the love she accepts. And Esther began to think that her lot was being made for her by the love that was surrounding her with the influence of a garden on a summer morning.

…トランスサム邸⁽²⁹⁾での生活は彼女の白昼夢の中に現われる生活では決してなかった。その生活の安逸さや高度の要請の欠除の中にはすでに退屈さがあった。彼女の周りをうろつき回るこの魅惑的でなくもない男性の愛は彼女のあらゆる開かれた前途に道徳的に月並な様相を与えていた。彼女はこの印象を多分明確に言い表すことができなかつたであろうが運命的な身分の格上げがなつた今、何となくそれは彼女の心の中に芽ばえ始めていたより高尚な野心が永久に消滅させられたような感じだつた。全人生が安っぽいものにされてしまったようだつた。それはあたかも何か学位をとろうとその記録すべき趣旨に全精力を集中させて学位論文を書かなくてはならないと信じていた若い学生が突然学位論文は絶望的で、ただ(英国の金で)27ポンド10シリング6ペンスを獲得できるだけだということが明確になつた時に感じる気持と同じであるかもしれない。

結局彼女は女性であり、自分の運命を決めていくことはできないのだ。…彼女の運命は彼女が受けとる愛によって彼女のために開かれるのだ。そしてエスターは彼女の運命は夏の朝の庭園の持つ影響力で彼女を取りまいてる愛によって彼女のために開かれつつあることを感じ始めたのであつた。)

つまり Esther は豪奢な Transome Court よりも父 Lyon 氏の持つあの家が属する世界に自分の人生があることを認識し、プライドの高い Harold の、家柄の特権を常にちらつかせているような物腰よりも、Felix の自分の思想と一貫した生きる姿勢により強い sympathy を感じたのである。a right to be idle を持ちそれでも優雅に裕福に暮らすことのできる high class の人々の中にある虚栄や欺瞞に気がついた今、苛酷な労働と貧困の中でさらに不幸に陥つた人々のために奔走する父 Lyon 氏の生や、世の中と個人のあるべき姿を真剣に考えている Felix の生が Esther には何と新鮮で真実のものに映つたであろうか。Esther の心の中ではもはや Transome 夫人は豪華な指輪をいくつもはめ、Anne 女王の治世に建てられた豪邸⁽³⁰⁾の女主人として邸に君臨する憧れの貴婦人ではなく、もはや当世では通用しない因襲にがん

じがらめになりそれでもなおかつその境涯にしがみついて生きていくことしかできない憐れむべき存在となっていた。

そういう意味では新興の manufacturing town, Treby Magna の, market town であった当時の忘れがたみである近郊の農村, 特にそれを代表する地主たちは時代の変化の犠牲者であったと言わなければならない。しかし, 彼らを不幸な立場に追いつめたのはそういう時代の変化ばかりではない。Transome 邸を破滅させたのは Transome 夫人の, 結婚当初からの Transome 氏への真の愛の欠如, 邸の顧問弁護士 Jermyn との恋と彼との間の Harold の出生, それと, 34年後におこったこの Harold の出生の秘密の暴露であった。これらは Adam Bede の Arthur Donnithorne の Hetty との過ちや, Silas Marner の Godfrey Cass の Eppie の出生にまつわる偽りの結婚の過ち等にも共通した, a right to be idle を持つ階級の生活の中にある虚栄や欺瞞にその根源が求められる。そして Transome 夫人のその罪の深さは Arthur や Godfrey の罪などとは比ぶべくもなく, Arthur が一時は Hayslope 村を離れることを余儀なくされたが数年後に帰省して Donnithorne 地主としての地位を安泰にし, また Godfrey は妻 Nancy との間に子供がなく Cass 家の将来に暗雲はあるものの Cass のだんなとしての威厳は何とか保っていたのとは大いに異なる結果となった。そして当の Transome 夫人に the worst misery とまで恐れさせていたその罪の発覚はプライドが高く虚栄心に満ち何よりも家柄体面を重んじる Transome 夫人や Harold の Transome Manor の領主としての立場を著しくそこない, 上記のような Treby Magna の工業都市への変遷による, 地主階級の栄光ある地位から疎外されるべき地位への陥落とあいまって, Transome邸を名実ともに破滅へとかりたてたのである。

しかし Transome 邸に関していえば, Treby Magna の町の工業化による外的圧力と Transome 夫人の非道徳的過ちのもたらした内的破綻という邸の破滅の2つの原因のうち Transome 夫人のその罪深い過去, すなわち Transome 家の内部的破綻にこそよりゆゆしい原因が求められるであろう。なぜならば, Treby Manor の所有者 Debarry 家は, Transome 家と同様過去の栄光は消え失せたとしても new conservative を標榜する息子 Philip の Tory での選挙当選で地域の特権階級としての地位は何らそこなうことなく保持しているし, Transome 家とて, 多くの借財を作った智慧の遅れた放蕩息子である長男 Durfey が死に, 次男 Harold が, 19歳で家を離れてから国外に暮らした15年の間に邸の再建のためにはありあまる膨大な富を築いた rich heir として帰国し, Treby Magna 界限では邸の安泰を疑う者は誰もいなかったのだし, Harold の Radical としての選挙出馬の失敗と Mrs. Transome の過去のその過ちがなかったら Transome 家も Debarry 家と手に手を組んでもはや弱者となった地主階級の連帯意識を強化し, Little Treby 村や Treby Magna の名士として地域の治安や裁判上の諸問題に大きな発言権を維持できたであろうからである。

このように Adam Bede や Silas Marner へと継承されてきた gentry 階級の内部的破滅に対する working class の正当性と繁栄のテーマは Felix Holt に至って Transome 家の破綻, 特に Mrs. Transome の不幸で寂しい晩年から死, と, Felix と Esther の真実の愛に

基づく前途洋々たる結婚という形で完結される。そして Transome 家の破滅は、邸の manor が村の大部分を占めると思われるその Little Treby 村が Treby Magna の都市に統合され、農村として存在しえなくなる日もそう遠くないのではないかという推測にもつながっていく。そういう意味からしても工業都市として将来の限りない発展を内に秘めた Treby Magna の町を Felix Holt の人生が象徴するのに対して Little Treby 村の運命は Transome 夫人の運命の中に象徴され、1832年の選挙法改正は Treby Magna の町の人たちの政治熱をますますあおりたて、都市と農村の思想的格差を広げ、いかに古い伝統と過去の栄光に裏付けられていようとも衰退過程にある Little Treby 村の衰退になおさら拍車をかけたのである。このように Little Treby 村は産業革命の影響という外的強制力と the right to be idle に象徴される、地主や rector の存在そのものにみられる内的矛盾とによって急速に新体制への変革が余儀なくされた村であった。Adam Bede の Hayslope 村や Silas Marner の Raveloe 村でくすぶり始めていた、村の旧体制から新体制への変革の火種は、それから30年余りを経た Little Treby 村でもえ上がったといえるであろう。そしてこれが George Eliot が時の指定をしたこれら3つの一連の小説の中で述べている共通のテーマなのである。そして彼女は旧村落が崩壊し新体制へと移行せざるをえなかった第一義的原因は Adam Bede のテーマにかかわる Arthur の非道徳性にみられる、旧農村の体制を守るべき地主階級の権威の失墜であると解く。

(4)

地主階級の権威の失墜の原因は、以上のような時代の変化にともなう社会的強制力と彼ら自身の中に求められる内的な破綻のほかに彼らとひじょうに密接な縁で結ばれている英国国教会教区牧師 (rector) の世俗化による宗教的権威の失墜があげられる。

Adam Bede の Hayslope 村の人々は Silas Marner の Raveloe 村の人々と同様、Felix Holt の中の新興の町 Treby Magna の人々が抱くような厳しい宗教意識はなくいたって開放的で、宗教とはこういうものであり牧師はこうあらねばならないというような規定も持たず宗教家のすばらしさはただその人の性格の中にあるのだという考え方が一般的であった。すでに述べたように Hayslope 村は隣町 Broxton の rector である Mr. Irwine の宗教上の管轄下であって、彼については当論文の4, (a)の部分で述べたとおりであるが、そのように読者に “This Rector of Broxton is little better than a pagan!” と叫ばせる彼を、Hayslope 村ではその村の最も手厳しい他に対する批判者である Mrs. Poyser ⁽³²⁾ ですら “... I should think his countenance is pleasant indeed ! and him a gentleman born, and’s got a mother like a picter. You may go the country round and not find such another woman turned sixty-six. It’s summat like to see such a man as that i’ the desk of a sunday! As I say to Poyser, it’s like looking at a full crop o’ wheat, or pasture with a fine dairy o’ cows in it ; it makes you think the world’s comfortable-like.” と手ばなしでほめたたえているのは、Irwine 氏の royalty の子孫というその貴族的血筋が Hayslope ⁽³³⁾

村のような裕福なイギリスの古い農村の中にただよう格式、伝統、家系の重視などという風潮にぴったり当てはまるものであったということのほか、上記のような Hayslope 村の村人たちの開けた宗教観に基づく彼の次のような性格によるものであった。

いわゆる彼は宗教的に熱意ある牧師ではなく、divinity よりも church history をより好み、教区民の opinions よりも彼らの性格をよく洞察する目を備えていて、明らかに克己心があるわけでもなく慈善に対しても気前がよいとは言えなかった。そしてさらにどんな理由があるろうとも一般大衆のために火刑に処せられるなどということは多分拒否したであろうし、貧しい人々を養うために自分の財産をなげうつことも決してなかったであろうが、輝かしい美德にえてして欠けているものであるあの charity が彼にはあって、他の人の失敗にやさしく evil を人に負わせることも好まなかった。非国教徒にも寛大で Mrs. Poyser の姪 Dinah Morris がはるばる Snowfield からやってきて Methodist の伝導者として Hayslope 村の Green 広場で説教した時も Methodist の教区への侵害を心配する他の教区民を彼はかえってなだめる立場に回り、Poyser 家をたずね Dinah と親しく言葉を交わすことすらしている。

しかし Irwine 氏のこのような性格的寛大さや、a full crop of wheat とか pasture with a fine dairy o' cows と Mrs. Poyser にたとえられ a good meal o' victual と Adam にたとえられていることは、一見彼が Hayslope 村の人々から絶賛されているようにみえても、そのたとえの中に精神性が全く感じられないことからわかるように、それらは Arthur と並びたつ、村人たちが gentleman として仰ぐ数少ない gentry 階級にある彼個人に対する賛辞であり、英国国教会牧師としての Irwine 氏への賛辞では決してないのである。

極度の貧困もなくしたがって社会的な矛盾も感じる事の無い Hayslope 村は、これは Silas Marner の Raveloe 村にも通用することであるが、宗教的には全く無政府状態にあつたのであり、Mr. Irwine は宗教家としてよりも a full crop o' wheat とか pasture with a fine dairy o' cows, a good meal of victual を常に期待できるこの村の村人たちの精神的な象徴に墮してしまっていた。現に Irwine 氏は Arthur の罪を未然に防がせることができなかったのである。

Arthur は Hetty とのことであれほど迷い、深い悩みを抱いていたのに、Irwine 氏には親兄弟にも近い感情を持っていながら、直接彼にそれを打ちあけはしなかった。それが、Arthur の心の弱さ、人生に対する安易な構え等によるものであったということはやさしい。しかし、Irwine 氏の宗教家としては珍しいほどの優雅さ、上品さ、寛大さの前では Arthur もそのような村の農民の娘に恋するなどという名門 Donnithorne 家の跡取り息子としてあるまじき生々しい自分の心の中を暴露する気にはなれなかったのであろう。また許されるはずのない子を妊娠し途方に暮れた Hetty も Irwine 氏に救済を求めようとは露ほども思っていない。それで結局は嬰兒殺しという大きな罪を犯すことになってしまうのである。Adam もまた、あれほど Irwine 氏をほめたたえてはいるけれども、最愛の婚約者 Hetty の投獄、裁判、絞首刑の確定という煉獄の苦しみの中からの救済を Irwine 氏に何ら求めてはいない。

すなわち Hayslope 村の人々は精神生活においては誰一人として rector を頼りにしては

いなかったのである。彼らが rector に求めたことは村人の精神活動にあまり深く立ち入らないことであり、宗教的に偏狭でないことであった。そして Irwine 氏はその要求にぴったり適応していたが、彼のあとを継いだ Irwine 氏と対照的に熱意ある rector・Ryde 氏はその熱心さのあまり不評をかったのである。これはやはり rector の存在の有名無実化といわなければならないであろう。この傾向は *Silas Marner* の Raveloe 村にも顕著であった。

Raveloe 村の人々は Hayslope 村の人々よりもさらに宗教心がうすい。Hayslope 村の人々はそれでもほとんどの人が毎日曜日教会に行くのを半ば義務として、半ば社交の一環として楽しみにしていたものであったが、Raveloe 村の人々は「そうきちょうめんに教会に行く方ではなく、日曜日という日曜日に教会に通うことは神の恩寵にあずかろうという欲ばった望みの表われであり、隣人たちに対する不当な優越感を得ようというものである—それは普通の人より是非いい人間になりたいという欲望であり、自分自身と同様に名付け親もおり死んだ時は平等に埋葬式もやってもらえる権利を持っている人々への非難をほのめかすものだと思っていない人は教区にはほとんど一人もいなかった」⁽³⁴⁾のである。しかし Hayslope 村のように一人の地主の下に秩序を持った村落共同体ではない Raveloe 村を統制しているのはそれでもなお教区教会なのであって、教会は一応は Raveloe 村の要となっていたが、村人にとってそこは魂の救済の場というよりは村の人々が構成する choir⁽³⁵⁾で毎週日曜日にいかにうまく歌うかという自分の音楽的芸術性を披露する場であった。

rector・Crackenthorp 氏の説教をこの Raveloe 村の村人氣質を代表している Mrs. Winthrop は good words と言ってはいるが、この rector は *Adam Bede* の中の rector, Mr. Irwine よりもなお—そう精神性に乏しく物品を贈答したり、食べきれないほどの食物で人を接待する社交儀礼の旺盛な Raveloe の村人たちの範を示す存在でもあった。その他当論文 4 の(b)に述べたとおり、十分の一税を物納させるとか、墓地を売るとか、また Cass 家の大みそかに⁽³⁶⁾行なわれる恒例の大舞踊会ではまっ先に⁽³⁷⁾ Osgood 夫人と踊り始める等、「極端に厳格な人々が間違いを起しやすい仲間のすることにどうしても非難せざるをえない」⁽³⁸⁾ような行為が目立っていた。そのため村で病人が出たり死人があつたりした場合まっ先に求められるのはこの rector ではなく Mrs. Winthrop であった。すなわち Crackenthorp 氏自身、rector を何ら厳粛な特別職とは考えておらず、自分は地位的には Squir Cass と同等で村の治安のためには大いなる発言権を持つ特権階級の一員であり、したがって rector といえども俗人の職業と何ら変らない物質的利益を追求する一職業と考えていたようである。Raveloe 村の人々は Crackenthorp 氏のこのような行状を、tithe の物納には少々異議を唱えてはいたもののおおむね是認していたが、*Silas Marner* の読者の中には、Raveloe 村の yeoman が構成する上流階級の過度の消費生活と社交好きの中に見られる社会的退廃に似た宗教的退廃を彼の背後に感じる人が多いであろう。ナポレオン戦争の終結で小麦の価格が下落するにつれ存続が危ぶまれる彼ら yeoman の運命の変化と共にこのような rector もその存在の意味を根本から考えなおさなければならなくなる時がかならずくるような気がする。⁽³⁹⁾

Irwine 氏や Crackenthorp 氏のこのような俗人的傾向は彼らから30年を経た *Felix Holt*の

由緒あるイギリスの農村・Little Treby 村の rector・John Lingon においてさらに色濃く現れる。「宗教家には全くふつりあいな服装をしている牧師は時宜を得た joke をいう粋なところがあるもの」であるが、a coloured bandana tied loosely over his cravat と large brown leather leggins を身につけることの好きなこの rector は彼の政治的見解まで joke にしてしまうようなところが常にあった。宗教家らしい厳格でもったいぶったかたくるしさは全くなく誰もが理解できる簡潔な親しみやすい口調で説教し、19世紀の初めから Little Treby 村の人々からは愛されてはきたが、村民の中では Tory の Aristocratic 聖職祿牧師としての印象が強くしたがって nomination の当日彼が Harold の応援演説に立った時、Dissenters はこの疑わしい Radical にほとんど声援を送る者はなかったが、Tory 党の農夫たちは a friendly “hurray” を彼に与えたのであった。彼ら Tory の農夫たちの中にあつた極立った思いは “Let’s hear what old Jack will say for himself ; he’ll have something funny to say, I’ll bet a penny.” であったのであり、生粋の Tory である Harold の Radical としての選挙出馬宣言がまき起こした Transome 家の深刻な事態も、上記のようにすべてのことを冗談めかしてしまうこの rector・John Lingon の応援演説にあつては微塵も感じられず、Harold のその Radical 宣言自体 Treby Magna 界限の人々の目には John Lingon のそういう性格のもたたらす一種の茶番劇に映つたのである。Transome 夫人が Harold のその非常識な宣言を何とか取りやめるよう説得してほしいとこの弟に最後の望みを託した時、Harold の Radicalism に一般的な Radicalism の中に見られるイギリス国教会攻撃の思想が全くない (bishop の権限を除く) ことを知ってほっとし、彼の選挙にはできるだけの協力を惜しまないことを確約してしまう。Harold の Radical 宣言に彼が驚かなかつたとは言えなかつたが Harold に対する彼の言動は “… I’m not bound to love Torism better than my own flesh and blood, and the manor I shoot over …” (「…私は自分の肉親やよく狩猟に出かけていく荘園よりもトーリー主義が好きだというつもりはない。…」) という思いにそのすべてが置かれていたのである。Transome 夫人が必死にしがみついている名門 Lingon の家系と、その家系の紋章のようになっている強い Torism も人生に対する信念のうすいこの弟には rector という社会的立場を守る上で必要である以上には重要視されてはいない。とにかく John Lingon は昔、世の中が今ほどせちがらくなかつた頃には “Cook-fighting Jack” (「闘鶏のジャック」) というあだ名を持っていたほどの道楽者で、現在は Sport (狩物) が何より好きで game (獲物) のことについては誰よりも博識であつて、豪邸に住み port-wine をすすりながら陽気に話す彼の言葉には Hayslope 村の Irwine 氏や Raveloe 村の Crackenthorp 氏よりもなおさら精神性は感じられない。

一方 Treby Manor の所有者、Sir Maximus Debarry の弟で Treby Magna の rector ・Augustus Debarry は当論文 4 の(c)で述べたとおり、長い伝統を持った英国国教会の牧師であることをこの上もなく誇りとし、Treby Magna の工業都市化が進むと共に活発な活動をし始めた多くの Dissenters を rector の立場から激しく糾弾し、これまでみてきた Irwine 氏や Crackenthorp 氏や John Lingon 氏などの英国国教会教区牧師の中でははるかに気骨

のある人であった。

しかし、Treby Magna の Dissenter・Mr. Lyon から、真の教会の体制 (the constitution of the true church) とイギリス宗教改革の直接的関連 (the bearing thereupon of the English Reformation) の2点について public discussion という形での clerical challenge を申し込まれた時、Augustus Debarry は Dissenter たちの博学博識、弁舌の力などにはとうていかなわないことをよく知っていて、もしその challenge を引き受けた場合徹底的にやっつけられ「Treby Magna ではもうその問題はすっかり説明されたのだからもう英国国教会はよって立つ健全な足1本も持っていないだろう」と彼らから言われるのが関の山だと思い拒絶しようとする。これまで見てきた rector の中でも健全だと思われた Augustus Debarry もまた、誇り高き古き豊かな農村で長い間その地位についていた rector 独特の、Dissenter 達から “Tory Falsehood and Clerical Cowardice” (「トーリー党の欺瞞者それにまた宗教界の卑怯者」) とか “The Meanness of the Aristocracy and the Incompetence of the Beneficed Clergy” (「貴族階級のさもしさと聖職禄付き牧師の無能さ」) と非難されるであろう rector の一員であったのである。

しかし当時の英国国教会教区牧師のみんながみんな宗教家としての神聖な任務に徹しきれていなかった訳ではない。Hayslope 村で Irwine 氏のあとを継いだ Ryde 氏は Reformation の doctrine を強く主張したり、教区民の家庭をたびたび訪ねたり、教会の合唱隊のクリスマスの日の巡回を酔っ払うことを奨励し神聖なことをあまりに軽々しく扱う行為だとして禁止したりかなり宗教家としての熱意に富んだ人であった。しかし Adam が彼のことを「教区の主席判事のようになりたがり人々のまちがった行為を厳しく罰し、あたかも Ranter⁽⁴⁴⁾ でもあるかのように説教台から彼らを叱りつけました。しかもなお Dissenters にはがまんがならず、Irwine 氏よりもはるかに激しく彼らに敵対しました」と憤懣やるかたない口調で評し、Mrs. Poyser が「Mr. Irwine はおいしい食べ物のようにそのことを考えないでもためになり、Mr. Ryde は一服の下剤みたいで人をしっかりつかんで悩ますけれども結局は大かた以前と変りはないのだ」と評していることからわかるように、Hayslope 村の村人たちには rector の宗教的情熱は大そう迷惑なおせっかいにすぎなかったのである。

このような、村人たちの精神生活の傾向は Raveloe 村や Little Treby 村、またかつての Treby Magna にも共通してみられるものである。それは、それらの村々が1人の地主あるいは数人の yeoman たちによって方向づけされた村落共同体であり、その村落が古いイギリスの村の伝統と格式を維持していくためには地位的には彼ら上流階級の一員であり、村の運営に大きな役割を担っている rector が彼らと考え方を一にし、何かにつけて協力することが要請され、それだけでも必然的に rector の俗人的性格が養成されたのであったが、その上そのような村の村人たちは豊かな村落の中で生活の基盤は保障されていてあえて宗教に救いを求めることもなかったのであり、rector も必然的に Adam Bede の中の Methodist の Dinah Morris や Felix Holt の中の Dissenter, Mr. Lyon 等の精力的な宗教活動とは異なる、冠婚葬祭を司どることより以上に教区民の生活に介入しない、禄によって身分の保障された職業宗

教家のスタイルを身につけざるをえなかったのである。そしてそれが結果的には rector の宗教家としての権威を大いに減じることになり、地主階級の権威の失墜を加速させることにもなったのである。

以上のように11世紀の初期の Norman Conquest 以来のイギリス封建農村の manor は以後国が農業国から商業国工業国に推移したことによる外的強制力や、またそのmanor, すなわち村落の中の村人たちの Liberalism, それからその村の頂点に立つ地主, rector, yeoman の権威の失墜等々の内的な破壊力によって、旧体制を持った村から新しい村へと脱皮していくのである。その過程にある村落が Adam Bede の Hayslope 村であり, Silas Marner の Raveloe 村であり, Felix Holt の Little Treby 村であるといえよう。そして George Eliot は当論文1で述べたとおり、長い伝統を持ったイギリス農村の特徴、full-uddered cows とかすいかずら(47)やいぬほうずきの花々で飾られた hedgerow に囲まれた家々とか村の中央に位置する魅力的な牧師館と教会、貴族的牧師、貧困をほとんど知らない田園地帯等々をイギリスの過去の持つ glory としていつくしんでいる。しかし彼女が Adam Bedeの中で地主のあり方を批判し、それと地主階級の者たちの営む生活の中にある矛盾、教区の中での rector の絶対的な宗教的力の軽減に村人たちの目を向けさせ、また Silas Marner でそれをさらに深化し、yeoman の弱体化にナポレオン戦争の終結が追いつけをかけるさまを描き、さらに Felix Holt の中で古い村落の貴族の生活への批判的立場をとっていることからみると、彼女が Felix Holt の冒頭の Introduction の中で Five and thirty years ago the glory had not departed from the old coachroads. と述べているその真意は、古い農村の中には確かに美しきよきものがあり、それに強いノスタルジアを感じるけれどもそこには多々人間の不平等性や矛盾や虚飾の美があったのであり、それは是正されていくべきであって、それが近代化であるという彼女の主張にあるような気がする。そして逆に glory の消えた状態として Felix Holt の Sproxtton や Treby Magna の町にみられるような、石炭採掘場やきたない身なりの坑夫、長時間労働で疲れ切った人々、空気の中に満ちた焦燥感等をあげていて、glory のある村が近代化されていく過程には確かに必然性があることは認めるものの、国の変化による外部的強制力による村の急激な近代化に George Eliot は眉をひそめている。しかし結論としてはその近代社会の象徴である Felix の、貴族の生まれでありながら Dissenter の牧師に育てられたという数奇な生いたちをもつ Esther との結婚に感じられるバラ色の希望を、その新生の社会に認めているのである。

注

- (1) 上田女子短期大学紀要第十四号
- (2) 「Adam Bede にみる George Eliot の女性観について」
- (3) Adam Bede, Chapter 6
- (4) Adam Bede, Introduction by Gerald Bullett
- (5) Felix Holt, Introduction by George Eliot herself
- (6) 上田女子短期大学紀要第十四号

- (7) *Silas Marner*, Chapter I Note 8
- (8) (I SAMUEL 18) Saul and David finished their conversation. After that, Saul's son Jonathan was deeply attracted to David and came to love him as much as he loved himself. (Good News Bible, Old Testament ; American Bible Society, 1976)
- (9) (PROVERBS 16, 33) Men cast lots to learn God's will, but God himself determines the answer. (同上 Old Testament)
- (10) *Silas Marner*, Chapter I
- (11) Ibid.
- (12) 上田女子短期大学紀要十五号 (1992年 3月) 4. Hayslope 村, Raveloe 村, Little Treby 村の実態について (b) Raveloe 村について
- (13) *Silas Marner*, Chapter I
- (14) *Silas Marner*, Chapter I, Note 8 から Calvin 派と推定
- (15) 「サイラス・マーナー」岩波文庫 土井 治訳 第二章
- (16) *Silas Marner*, Chapter II
- (17) 1989年 3月刊 「*Silas Marner* にみる George Eliot の児童観について」
- (18) Nemesis : 因果応報・復讐の女神 (ギリシャ神話)
- (19) 上田女子短期大学紀要第十四号 (1991年 3月) 1. はじめに
- (20) Ibid.
- (21) グラスゴー大学については「アダム・スミス研究」(株式会社 未来社 水田洋著 1968年) PP 46-54 に詳細な記述がある。Felix の母親の言葉の中に「息子が Glasgow で学んだ」という記述がある。
- (22) Adam Smith (1723-90) スコットランドの経済学者, 倫理学者 代表作 *The Wealth of Nations* (1776)
- (23) *Felix Holt*, Chapter V
- (24) 同上「アダム・スミス研究」 P 42
- (25) *Mary Barton* by Mrs Gaskell, Everyman's Library 1964 P 136
- (26) Charles Dickens (1812-70) 英国の小説家。*Pickwick Papers* (1836-37), *David Copperfield* (1849-50), *Great Expectation* (1860-61) を初め多くの不朽の作品を残した。
- (27) *Felix Holt* Chapter XXXVIII
- (28) Ibid.
- (29) *Felix Holt* Chapter XLIII
- (30) (1665-1174) 英国女王 (1702-14), Stewart 家最後の君主
- (31) 上田女子短期大学紀要第十五号 (1992年 3月) 4. Hayslope 村, Raveloe 村, Little Treby 村の実態について (a)Hayslope 村について
- (32) *Adam Bede* Chapter 17
- (33) *Ibid*, Chapter 8
- (34) *Silas Marner* Chapter 10
- (35) choir : 教会の聖歌隊, 合唱隊
- (36) 上田女子短期大学紀要第十五号 同上 (b)Raveloe 村について

Adam Bede の Hayslope 村, *Silas Marner* の Raveloe 村, *Felix Holt* の Little Treby 村がそれぞれの小説に意味するもの(3)

- (37) 当時はナポレオン戦争のさなかにあつてフランスからの穀物の輸入が止められイギリス国内の穀物価格が騰貴していたため。
- (38) *Silas Marner* Chapter 11
- (39) Napoleonic Wars : 1792年のフランス革命戦争から1815年の Waterloo 会戦にいたるまでの, ナポレオン一世が欧州制覇を企てた数次の戦争の総称。
- (40) *Felix Holt* Chapter XVIII
- (41) *Ibid.* Chapter II
- (42) 同上 上田女子短期大学紀要第十五号 4. c. Little Treby 村について
- (43) *Felix Holt* Chapter XXXIII
- (44) Ranter : (19世紀の初めころに分離した)原始メソヂスト教徒。大声で説教や応唱をした。
- (45) *Adam Bede* Chapter 17
- (46) *Ibid.*
- (47) 上田女子短期大学紀要第十四号 (1991年3月) 1. はじめに